

狂言は世界最古の喜劇

日本人らしさは、時代によって変わるかもしれませんが、いつの時代にも通じる日本人しさはあるのではないかと私は思っています。例えば、豊かに与えられた日本の四季の中で、日本人の感性は育ってきました。一見この季節感からほど遠いように思える笑いのセンス、実は日本の自然観や季節感から生まれてきています。狂言を演じているとそれがよくわかるのです。日本人はもともと感性豊かに笑っていたのです。狂言は笑いの芸能です。狂言を観れば、昔の日本がわかりますし、日本人の感性がわかります。

狂言の生まれた室町時代の人々は、現代の私たち以上にもつと暮らして楽しんでいました。たとえば歌を詠むことなどもそのひとつです。歌を詠んだ経験のある方ならばおわかりだと思いますが、歌を詠もうとすると、急に自然が身近に感じてくるから不思議です。歌を詠み、謡を謡い、舞を舞う。能舞台が野外にあったことも、自然をみんなで楽しんでいた証拠です。歌を詠んだり、舞を舞ったりが現代の日本の常識のように広まったとしたならば、狂言の舞台もぐんと身近に感じていただけるはずです。若者がさらりと謡を謡ったりしたら、どんなにかついでだろうと思えます。でも、何も歌を詠まなくても狂言を観ていただだけで、日本人がもともと持っていた感性を感じて頂けます。

古典芸能と言えど、難しくなく、あくまで、楽しく狂言の舞台が広まってもらえばと、「日本室町化計画」と名付けました。この室町時代の感覚や感性を狂言を通して、笑いとともに皆様に伝えていくことができれば幸いです。



プログラム

公演時間：1時間20分(休憩を含む)

《Aプログラム》

- ①狂言のお話
- ②鬼瓦(20分) 出演者2名
— 休憩 10分 —
- ③盆山(15分) 出演者2名
- ④和泉元彌氏によるトーク&ワークショップ

《Bプログラム》

- ①狂言のお話
- ②仏師(25分) 出演者2名
— 休憩 10分 —
- ③盆山(15分) 出演者2名
- ④和泉元彌氏によるトーク&ワークショップ



鬼瓦 おにがわら 久しく在京の大名が帰郷するにあたって、因幡堂の薬師如来へ参詣する途中、鬼瓦を見て国元の妻を思い出す。

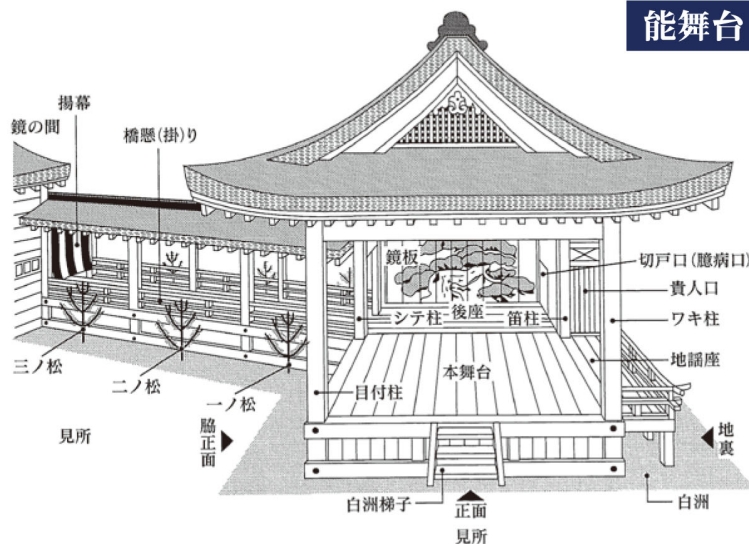


盆山 ぼんさん 盆山の蔭に隠れた盗人は、その家の主人から、犬だ、猿だとからかわれ、最後には鯛だと言われ、飛び跳ねながら逃げる。



仏師 ぶつし 仏像を求めて都に上がった田舎者に、仏師と称してすっぱが近づき、前金を取ってから、自分が仏像になりすましますが…。

能舞台



狂言を楽しんで頂くときに、能楽堂の仕組みを知っていただくと、興味がひと味違います。現在は、簡易舞台の設置も可能なので、体育館等のスペースを活用した公演も可能です。



「シェイクスピア」について、英語でワークショップを行なうなど海外での狂言普及に尽力し、近年は、狂言の伝承・普及とともに小・中学生の「こころの教育」に努めるなど、多方面で精力的な活動を展開している。

